

ショートメッセージ

2022年10月16日(日)「神殿の完成」

暗唱聖句: 主御自身が建ててくださるのでなければ 家を建てる人の労苦はむなし。

(詩編 127:1)

前回の箇所から、めでたく神殿の再建が始まりました。紀元前536年ごろとされています。神殿の基礎が据えられた頃には民の感動が一層高まり、「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」と賛美する声、昔の神殿を知る者の泣き叫ぶ声が遠くまで鳴り響きました。(エズラ 3:10-13)

そこから今回の箇所のように神殿が完成するまでは、約20年の月日が流れています。建築自体にそれだけかかったのでしょうか?そうではなく、再建の過程で長い中断期間を強いられたのです。

エズラ記4章では、捕囚の間にこの土地に住んでいた人々が建築への協力を申し出ています。しかしイスラエルの人々は「わたしたちの神のために神殿を建てるのは、あなたたちにはではなく、わたしたちに託された仕事です」(4:3)と断ります。これに気分を害したのか、元から妨害するつもりだったのか、土地の人々は民の士気を鈍らせ脅かし、有力者の買収までして計画の挫折を狙いました。住み慣れた土地に、4万人以上の人々が突如現れ、ここが我が故郷とばかりに神殿まで建て始めたことへの反発があったのかもしれませんが。

さらに人々は、その時の王にも忠告をします。エルサレムの都と神殿の再建が成れば、税も払わないだろうし、かつて「反逆の都」としてあちこちに損害を与えてきたので、今回も王の領土が失われるだろうと述べました。これを受け入れた王は、武力によって工事を中止させたのです。

70年の時を経てようやくエルサレムに帰り、神殿の再建を喜び祝った人にとって、この中止によってただ時が過ぎていくことは、どれほど辛かったでしょう。コロナ禍において、礼拝に集まることについて一進一退を繰り返す私たちにも、その気持ちの一端は想像できるように思います。

このような妨害と中断を受けながら、人々を再び立ち上がらせたのは神さまの御言葉でした。エズラ記5章では預言者ハガイやゼカリヤが、預言を通して人々に奮起を促します。

**「国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる。/働け、わたしはお前たちと共にいると/万軍の主は言われる。」**(ハガイ2:4)

**「彼こそ主の神殿を建て直し/威光をまとい、王座に座して治める。」**(ゼカリヤ6:13)

土地の人々による直接的、精神的な妨害。権力者による政治的、軍事的な妨害。たとえば私たちがこういったことで教会の集まり自体を止められたら、どうでしょうか。自分たちの無力さを前に膝をつき、諦めたとしても不思議ではありません。イスラエルの民も20年近く、抗うことが出来ませんでした。神殿の完成を見ずに天に召された人もいれば、基礎が据えられただけの神殿を不思議に思いつつ子どもから大人へ成長した人もいたでしょう。この、停滞しきった状態を打ち破らせるために、御言葉の持つ力が表されています。

人々が御言葉から力を受け、神さまが共におられる確信をもって再建を始めたことは、西方から来た巡察官とのやり取りにも表れています。「この神殿を建て、その飾りつけを完成せよ、と誰がお前たちに命令したのか。」との問いに対して、「私たちは天地の神のしもべであり、イスラエルの偉大な王が何百年も昔にここに建てた神殿の復興を図っています。」と答えています。また再建が完了し

たことを示す箇所では「イスラエルの神の命令と、ペルシアの王キュロス、ダレイオス、アルタクセルクセスの命令によって建築を完了した。」とも書かれており、人間的な権威の上に、神の存在と命令があるという信仰が、よく表れています。

長い時間と困難を経て、ようやく完成した神殿。人々はまず、喜び祝いつつ、奉獻を行いました。よかった！嬉しい！という感情だけで盛り上がるのではなく、しっかり神さまと向き合い、神さまの命によって建てられたこの神殿を、神さまにお捧げする。そこには「贖罪の捧げ物」も捧げられており、先祖も含め自分たちの罪にも向き合いながらの奉獻であったことが分かります。こうした民の姿からは、どこまでも神さまを中心とした生きざま、深い信仰が見て取れます。

私たちが主日の礼拝に集う時、こうした喜びや悔い改めの想いを携えて、会堂に集うことができるのでしょうか。捕囚期間と建築中断期間を含めて、100年近くの時を経て神殿が再建されたことと、1週間ごとに礼拝に集えることは、スケール感が違うかもしれません。しかし、最も神さまを近くに感じつつ礼拝できる場所から離れ、世の困難と向き合い戦いつつ、またその場へ帰っていく・・・という意味では、重なる部分があるとも思うのです。習慣としての礼拝出席という面が際立ち、無感情にその場に与っていなかったか、自分に問いたいと思われました。

イスラエルの民が神殿を失っていた期間を、私たちが過ごす主日以外の日に重ねるならば、やはりその間にいかに祈り、御言葉を受け、神さまを中心とした生活を送れるかが鍵なのでしょう。捕囚の間もダニエルのように信仰を貫き祈り続けた人がいて、建築を中断した期間もハガイやゼカリヤのように御言葉を届ける人がいました。こうした祈りや御言葉によって、民はまたエルサレムに帰り、神殿で主を礼拝したいという思いを持ち続けること、あるいは回復させることができました。そしてその熱い思いが、完成した時の大きな喜びへと繋がりました。

こうした姿に学び、日々祈ること、御言葉を受けることを通して、早く礼拝がしたい！教会に行きたい！と熱く願い、主日には喜びいっぱい会堂に入っていく。忙しさや習慣化のなかで失いかけていた、そのような信仰生活を取り戻してまいりたいと思います。

● 分かち合い

- ・ なぜ、毎週礼拝に出席するのか人に問われたら、どのように答えるでしょうか。
- ・ コロナ禍によって、会堂に集いたくても集えない期間を過ごしてまいりました。礼拝への思いや感じ方に変化・気づきがあれば、分かち合いましょう。

(担当：K.G.)